

### **III-1**

**「子どもの生きる力を育む」**

**目標1．健やかな心と体の育成**

**目標2．生活習慣と社会性の育成**

**目標3．確かな学力の育成**

<b>基本方向</b>	1	「子どもの生きる力を育む」	<b>評価</b>
<b>目標</b>	①	健やかな心と体の育成	A
<b>具体目標</b>	ウ	豊かな心と人間性の育成	2.5
<b>施 策</b>	(3)	交流活動や体験活動の充実	
	(4)	道徳教育・人権教育の充実	

<b>具体施策</b>		<b>評価</b>
(3)-1	子どもが地域の人や自然とふれあう活動を広げます。	3.0
(3)-2	親子の関わりが豊かになるような地域活動を支援します。	2.0
(4)-1	各学校で、授業の工夫をしながら子どもの心に響く道徳教育を推進します。	3.0
(4)-2	教育活動全体を通じた人権教育に取り組み、偏見や差別を許さない意識や実践力の育成を推進します。	2.0

<b>主な取り組みの成果</b>	
(3)-1	・児童会、生徒会活動や福祉活動等を契機として地域の行事に参加する児童生徒の育成を図ることができた。
(3)-2	・学区・地区地域協働合校推進事業において、清掃活動や防災体験などの地域活動や「しめ縄づくり」や「かまどベンチづくり」などの親子で参加できる事業を実施した。(事業実施数については、まちづくり協議会発足を控え、事業の見直しや整理をした学区・地区があり、前年度より減となった) ・市立幼稚園、小学校、中学校の各単位PTAに対して家庭教育学習事業(生活習慣、食育、子ども読書など)推進のために補助金制度を設け、家庭教育事業に対する経費の一部を補助した。昨年度に比べて実施件数(17件→20件)、参加者(731人→908人)が増え、多くのPTA会員に家庭教育学習をしていただいた。
(4)-1	・各小中学校において、子どもの発達段階に応じた道徳の教材や資料の充実を図るとともに、ワークショップやグループ学習など学習形態を工夫した授業を展開した。それらをとおして、他者への思いやりや共感の心情等の育成について充実した指導ができるようになってきた。
(4)-2	・すべての中学校区で、校種間の交流を図ることによって、各校種段階での課題や共通して取り組む内容等について共通理解、共通実践が進むようになってきた。 ・平成23年度の各学校の集計結果、前年度比で「人の気持ちが分かる人間になりたい」と回答した児童生徒の割合が2.4ポイント、「いじめはどんな理由があってもいけない」と回答した児童生徒の割合が2.1ポイントそれぞれ増加した。

<b>今後の課題</b>	
(3)-2	・学区・地区地域協働合校推進事業については、事業に参加するだけでなく、企画段階から参画いただけるための工夫が必要である。 ・家庭教育学習事業費補助金制度については、中学校PTAの活用が少ないとから、補助金制度を活用した家庭教育学習実施についての啓発をしていく必要がある。
(4)-1	・学校教育全体のなかで共感の心情や他者理解の実践的態度をさらに育成していく必要がある。
(4)-2	・人権が尊重される学習活動づくり、人間関係づくり、環境づくりを視点にした学校づくりを中学校区の広い範囲のなかで継続していく必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(3)-1 地域の行事に参加する児童生徒の育成	学校教育課	児童会、生徒会活動や福祉活動等を契機として地域の行事に参加する児童生徒の育成を図った。(※60%以上)	参加した児童生徒の割合		76.1	%	↗	a
(3)-2 地域協働合校推進事業	生涯学習課	地域の大人と子ども(親子)に地域活動をしていただけるよう、学区・地区地域協働合校推進事業を実施した。	学区・地区地域協働合校推進事業実施数	78	67	事業	↘	c
(3)-2 家庭教育学習事業費補助金	生涯学習課	生活習慣、食育、有害情報、読書など単位PTAが実施する家庭教育学習事業に対して補助金を交付した。	実施数	17/29	20/29	校・園	↗	a
(4)-1 道徳教育の推進	学校教育課	道徳の時間を中心に「人の気持ちがわかる人間になる」児童生徒の育成を図った。(※92%以上)	肯定的回答をした児童生徒の割合		92.3	%	↗	a
(4)-2 中学校区同和教育実践交流会	学校教育課	保幼小中高間の一貫した同和教育を推進するための交流会を中学校区ごとに開催した。	開催中学校区数	6/6	6/6	校区	→	b

上表の※は「草津の教育がめざすもの」に掲げる成果指標値

「草津の教育がめざすもの」は、平成23年度に編纂し、草津市教育振興基本計画の実現のための平成26年度を到達年度とした学校教育に関する成果指標を設定した。

#### 外部評価委員の意見

- 近年まちづくりが進んできており、地域協働合校推進事業の内容については、まちづくり協議会と地域協働合校とどちらがやっているのかわからない部分が多いので、今後整理願いたい。
- 事業をしていくには、量的な拡大と質的な進化があるが、このシートは量的拡大を評価する評価表になりやすい。事業の当初は量的拡大で良いが、だんだん中身が問われるようになるので、今後、評価の仕方を検討し、質的評価をどれだけピックアップするかを考えいかなくてはいけない。
- 取り組み状況の数値について、数値の減少が必ずしもc評価(成果減)とは限らない。事項を扱う時の扱い方を考えた方がより評価しやすくなると思う。また、どういう基準で評価したのかを、来年度以降だんだんと整理していく必要がある。

<b>基本方向</b>	1	子どもの生きる力を育む	評価
<b>目標</b>	①	健やかな心と体の育成	A
<b>具体目標</b>	工	健やかな体の育成	2.3
<b>施 策</b>	(5)	健やかな体づくりの推進	/
			/

<b>具体施策</b>		評価
(5)-1	体力を培う学校体育の充実と中学校運動部活動の改善・充実を図ります。	2.0
(5)-2	子どもが運動に関心を持ち、スポーツに親しむためのスポーツ環境の充実を図ります。	2.5
(5)-3	子どもの体力の重要性について正しい認識が広がるよう、啓発を推進します。	3.0
(5)-4	学校での食育と家庭への食生活のあり方の啓発を推進します。	1.7

<b>主な取り組みの成果</b>	
(5)-1	・小学校におけるジュニアスポーツフェスティバルKUSATSUの開催や中学校へのスペシャリスト活用事業(*1)を通して、児童生徒が運動に親しみ、自らの能力を発揮できる機会の充実に努めた。
(5)-2	・スポーツ少年団の活動に支援を行い、子どもが運動に関心を持ち、スポーツ活動に参加する機会の充実を図った。また、平成23年度の新規事業として子どもアスリート体験事業を実施し、94人の参加があった。
(5)-3	・新体力テストの実施を通じて、体力の重要性についての認識を深めるよう努めた。
(5)-4	・各小・中学校における食育月間、食育の日の取り組みの集約・指導助言を行い、食育を通して、食の重要性について児童や保護者への啓発を推進した。 ・地場農畜産物を学校給食の食材に取り入れることにより、生産者には安全および安定供給の意欲や意識の向上等につなげることができ、児童には地域農畜産物に対する愛着を深め、郷土愛につながる食育の推進を図ることができた。また、地場農畜産物利用率は平成23年度は31.8%であった。 ・アレルギー疾患の児童に対して、学校生活管理指導表を保護者から提出してもらい、症状等の把握により緊急時の対応準備を進めた。

<b>今後の課題</b>	
(5)-1	・ジュニアスポーツフェスティバルKUSATSUに向けた各学校における取り組みに対して、継続した支援を行う必要がある。
(5)-3	・新体力テストの結果、前年度比で向上種目は増えているが、数値が低下した種目では年々数値が低下する傾向がみられるため、向上する取り組みが必要である。
(5)-4	・学校生活管理指導表の提出者の症状変化等、保護者と連絡を密にしながら取り組む必要がある。 ・アレルギー対応は、学校生活管理指導表の提出者の症状変化等、保護者と連絡を密にしながら取り組む必要があり、アレルギー成分のできるだけ少ない物資を選定する必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(5)-1 ジュニアスポーツフェスティバルKUSATSU	スポーツ保健課	市内6年生全児童によるスポーツイベントを開催した。	参加児童数		約1200	人	↗	a
(5)-1 スペシャリスト活用事業	スポーツ保健課	部活動の指導者の指導力は向上したが、更なる向上を目指して、中学校体育部活動への外部指導者の派遣事業を実施した。	派遣者数	4	2	人	↘	c
(5)-2 スポーツ少年団育成事業	スポーツ保健課	スポーツ少年団本部並びに単位団の活動への支援を行った。	登録者数	1,127	1,169	人	→	b
(5)-2 子どもアスリート体験事業	スポーツ保健課	子どもにスポーツの楽しさを知ってもらうきっかけになるよう、初心者向けの運動教室を開催した。	参加者数		94	人	↗	a
(5)-3 新体力テスト	スポーツ保健課	小・中学校で新体力テストを実施した。	向上種目数/実施種目数	33/86	55/86	種目	↗	a
(5)-4 食育の日・食育月間	スポーツ保健課	食育の日・食育月間の取組を各校で進めた。	実施校数	19/19	19/19	校	→	a
(5)-4 食に関する指導	学校給食センター	児童対象の食育学習を実施した。	学校訪問	160	115	回	↘	c
		保護者対象の食育講座を実施した。	参加者数	1,141	815	人	↘	c

スペシャリスト活用事業(\*1)…中学校体育部活動において、生徒の技能習得や教職員の指導力の向上、部活動の活発化と充実を図るため、スポーツの技能や専門知識を持つ外部指導者(スペシャリスト)を講師に招く事業

外部評価委員の意見
○(5)-1スペシャリスト活用事業について、指導者の指導力が向上したという成果があるのならば、派遣人数が減っていてもaまたはb評価で良いのでは。人数だけではなく、それと効果がどう関係しどう評価したのかを説明に記載してほしい。
○アレルギーを持つ子に対して、アレルギー表を提出させた後の指示がないので、各家庭への対応をしっかりしてほしい。
○(5)-3主な取り組みの成果には「努めた」ではなく、「努めた結果どうなったのか」を記載して欲しい。体力テストを実施した後に、認識が深まったかどうかをチェックするアンケートなど実施してその結果を載せれば、より効果的に努力の成果が伝わる。

<b>基本方向</b>	1	子どもの生きる力を育む	評価
<b>目標</b>	①	健やかな心と体の育成	A
<b>具体目標</b>	オ	子どもの安全・安心の確保	3.0
<b>施 策</b>	(6)	子どもの安全・安心の確保	/
			/

<b>具体施策</b>		評価
(6)-1	自分の身は自分で守れるよう、学校での安全教育を推進します。	3.0
(6)-2	防犯ブザーの活用やICTを活用した防犯連絡システムの導入を図り、地域と連携した防犯対策に取り組みます。	3.0
(6)-3	子どもの安全確保を図るボランティア活動を支援します。	3.0

<b>主な取り組みの成果</b>	
(6)-1	・スクールガードリーダーの巡回指導によって、子ども自身はもちろん、教職員や保護者についても安全確保の方法を学べた。
(6)-2	・携帯用防犯ブザーを小学校全新入生に配布し、「自分の身は自分で守る」という意識を持つように努めた。 ・緊急時用のメール配信システムを導入し、不審者情報や非常変災時の連絡等を速やかに行える仕組みを整えることができた。
(6)-3	・登下校時の見守り活動を行う、スクールガード(*1)登録者が昨年より増加し、児童の登下校が、より安全・安心を得られるようになった。

<b>今後の課題</b>	
(6)-1	・子どもが不審者等に遭遇した時に、すぐ逃げる、助けを求める、警察に通報する等実際に行動できるよう訓練する機会を提供する必要がある。
(6)-2	・登下校以外の外出時にも防犯ブザーを持ち歩くよう、更なる指導が必要である。また、防犯ブザーの適切な使用方法等についても、十分な指導が必要である。 ・保護者のメール登録促進や実際場面での有効な活用方法の検討を進めていく必要がある。
(6)-3	・スクールガード登録者数を増加させ、既存の登録者の負担を減らす必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(6)-1 スクールガード・リーダー巡回指導の実施	スポーツ保健課	スクールガード・リーダーが各小学校を巡回し、安全確保のための指導を行った。	実施校数	13/13	13/13	校	→	a
(6)-2 携帯用防犯ブザーの配布	スポーツ保健課	小学校新入生を対象に、携帯用防犯ブザーを配布した。	配布率	100	100	%	→	a
(6)-2 緊急メール配信システムの導入	学校教育課	学校に設置するコンピュータネットワークシステムを利用した緊急時用のメール配信システムを導入した。	導入校数	19/19	19/19	校	→	a
(6)-3 学校安全対策ボランティア巡回事業	スポーツ保健課	児童の登下校時にスクールガードが見守り活動を実施した。	スクールガード登録者	3,635	3,723	人	↗	a

スクールガード(\*1)…各小学校に登録した地域住民が子どもたちの登下校時刻に合わせて、通学路などの巡回パトロールや見守りなどを行う学校安全ボランティア

外部評価委員の意見
○(6)-2 緊急メール配信システムについて、今後は保護者への活用促進、啓発の部分が大きなウェイトを占める。使用訓練などを実施するとともに、メールシステムを利用できない家庭への安全対策とどう並行してやっていくかが今後の課題になる。メールと合わせて、不審者情報を文書でも出すなど、二重三重で備えることが大事である。
○(6)-2 携帯用防犯ブザーの配布について、配布して終わりでは意味がない。今後どのように啓発活動を持続的にしていくかが問題である。
○スクールガード登録者数はすごく増えているが、全体をきちんと見られる人とすると、人数はぐっと減る。募集のかけ方を検討する必要がある。人数が増えているからすべての人が見守ってくれているというわけではないので整理する必要があるのでは。問題は登録者数ではなく、どれだけ効果的にスクールガードを使うことができるかということである。

<b>基本方向</b>	1	子どもの生きる力を育む	評価
<b>目標</b>	②	生活習慣と社会性の育成	B
<b>具体目標</b>	ア	家庭教育の啓発	2.5
<b>施 策</b>	(7)	生活習慣形成のための啓発活動の推進	/
			\

<b>具体施策</b>		評価
(7)-1	「早寝・早起き・朝ごはん」や「あいさつ」等、基本的な生活習慣の確立を図るための啓発活動を推進します。	2.0
(7)-2	よりよい生活習慣形成のための「家庭のルールづくり」を支援します。	3.0

### 主な取り組みの成果

- (7)-1
  - ・市内の幼稚園、小学校、中学校に通う子どもの家庭に対して「家庭のカレンダー」を配付した。学校では、学級活動で活用したり、校内での掲示や放送で紹介するなどして生活習慣改善について発信するなど、家庭教育の重要性を啓発することができた。
  - ・広報くさつで家庭教育に関する記事(あいさつ、早寝・早起き、子ども読書の大切さなど)を掲載し、市民に啓発をおこなった。
  - ・市立幼稚園、小学校、中学校の各単位PTAに対して、あいさつや生活リズムなど家庭教育啓発を図るため、家庭教育出前講座を開設し、家庭教育学習を推進した。
- (7)-2 家庭教育力向上を図るために、各単位PTAが実施する家庭教育学習事業に対して補助金を交付した。

### 今後の課題

- (7)-1
  - ・継続した事業の展開が必要である。
  - ・家庭教育学習出前講座メニューについて、利用者のニーズと提供すべき内容を検討し、今後の利用促進と啓発をしていく必要がある。
- (7)-2
  - ・家庭教育学習事業費補助金制度については、中学校PTAの活用が少ないことから、補助金制度を活用した家庭教育学習実施についての啓発をしていく必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(7)-1家庭教育学習出前講座	生涯学習課	家庭教育学習出前講座を開設した	開設数	9	6	箇所	↓	c
(7)-1広報くさつへの記事掲載	生涯学習課	家庭教育に関する記事を掲載した	回数	5	4	回	→	b
(7)-1家庭のカレンダー配付(※1)	生涯学習課	家庭のカレンダーを作成・配付した(H21に渡っていない家庭へ配付)	配付率	100	100	%	→	a
(7)-2家庭教育学習事業費補助金	生涯学習課	生活習慣や食育など、単位PTAが実施する家庭教育学習事業に対して補助金を交付した	実施数	17/29	20/29	校・園	/	a

※1 家庭のカレンダー配付については、平成21年度に市内の公立幼稚園、小・中学校に在籍の全家庭に配付した。平成22年度、23年度はすでに配付している家庭(兄・姉が同じ学校・園に在籍している等)を除く新入生、市外からの転入者等の家庭に配付した。

外部評価委員の意見
特になし

<b>基本方向</b>	1	「子どもの生きる力を育む」	<b>評価</b>
<b>目標</b>	②	生活習慣と社会性の育成	B
<b>具体目標</b>	イ	社会性を育む教育の充実	2.4
<b>施 策</b>	(8)	規範意識・社会性を育てる学校教育の推進	/
	(9)	キャリア教育の推進	/

<b>具体施策</b>		<b>評価</b>
(8)-1	学校や社会のルールを守る指導を強化し、社会の一員としてのあり方を考える学習を充実します。	3.0
(8)-2	不登校の解決に向けて学校全体で取り組みます。	2.0
(8)-3	小中学校で福祉体験学習や社会体験学習を推進します。	2.0
(9)-1	子どもの発達段階に応じて、職業や社会貢献、自分の生き方について考えさせるキャリア教育を行います。	2.0
(9)-2	小中学校で、社会の最前線で活躍する人たちを招いての特別授業を行います。	3.0

<b>主な取り組みの成果</b>	
(8)-1	・道徳の時間を中心に、すべての教育活動で道徳的実践力の育成を図った。全中学校で少年センターと警察との連携による初発型非行防止教室を実施し、規範意識を高めるよう取り組んだ。
(8)-2	・各校ともアセスメントとプランニングのスキルが向上し、不登校の子どもや保護者への相談体制や学校不適応などに関して組織対応することが定着してきている。
(8)-3	・全小中学校で発達段階に応じて、福祉体験学習を実施することができた。
(9)-1	・市内全中学校の2年生で「職場体験学習」を各校5日間実施した。78%の生徒が働くことは楽しい、56%の生徒が、自分の進路や将来の職業について考えるようになったと答えている。
(9)-2	・各校が独自の目標と特色ある教育計画を推進する「学校教育モデルプラン推進事業」を展開し、そのなかで、各界トップによる特別授業を全小中学校で実施できた。児童生徒の学びへの興味関心を深め、将来の夢や希望の実現をめざして、自分の生き方を見つめる貴重な機会にすることができた。

<b>今後の課題</b>	
(8)-2	・不登校児童生徒への指導・支援に福祉や司法機関との連携を要するケースが増加しており、関係機関とのコーディネートがより重要になってきている。
(9)-1	・生徒の「体験してみたい」「働いてみたい」という思いにできる限り寄り添うために、職場体験を受け入れていただく事業所の拡充が必要である。
(9)-2	・各校のモデルプラン事業のなかで特別授業の位置づけをより明確にしていくことや適任となる講師を確保していくことが求められる。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(8)-1 道徳の時間の実施	学校教育課	道徳の時間を中心に「学校のきまりを守る」児童生徒の育成を図った。(※91%以上)	肯定的回答をした児童生徒の割合		91.7	%	↗	a
(8)-2 子ども生き生き支援事業	学校教育課	ベースシート(*1)を活用したアセスメント・プランニング会議を実施した。	活用校数	19/19	19/19	校	→	b
(8)-3 福祉体験活動の実施	学校教育課	各学校がテーマを定め、シア体験・車椅子体験・アイマスク体験等を実施した。	実施校数	19/19	19/19	校	→	b
(9)-1 中学生チャレンジティーク	学校教育課	5日間の職場体験学習を実施した。	実施校数	6/6	6/6	校	→	b
(9)-2 各界トップのスペシャル授業	学校教育課	各界トップによる特別授業を開催した。	開催校	6	19	校	↗	a

上表の※は「草津の教育がめざすもの」に掲げる成果指標値  
「草津の教育がめざすもの」は、平成23年度に編纂し、草津市教育振興基本計画の実現のための平成26年度を到達年度とした学校教育に関する成果指標を設定した。  
ベースシート(\*1)…不登校や学校不適応の課題を抱える子どもの支援を目的に、教育委員会で開発した「課題の整理」、「課題解決の方策検討」のための作業シート

外部評価委員の意見
○(9)-1中学生のチャレンジティークは学校現場にすると大変な取組であり、全校で取り組めるようになっているのであればb評価はなかなか厳しい評価だと思う。
○(8)-3の福祉体験活動について、車椅子体験などは人に対する共感性などを実感してもらう非常に大事な機会である。その体験活動を通じて子どもたちがどのような成長をしていったのかを測る、質的な評価をすることが大切なので、次年度以降、事業の効果を見ていっていただきたい。

<b>基本方向</b>	1	子どもの生きる力を育む	評価
<b>目標</b>	②	生活習慣と社会性の育成	B
<b>具体目標</b>	ウ	青少年の健全育成	2.3
<b>施 策</b>	(10)	青少年の健全育成運動の推進	△
			△

<b>具体施策</b>		評価
(10)-1	青少年の健全育成に関わる団体や指導者の育成・支援を図ります。	2.0
(10)-2	青少年が地域活動に参加する仕組みづくりを進めます。	3.0
(10)-3	青少年の非行防止の取り組みと立ち直りの支援の充実を図ります。	2.0

<b>主な取り組みの成果</b>	
(10)-1	・青少年健全育成市民運動の要である市民会議と学(地)区民会議の諸活動を積極的に支援することにより、各事業を活性化させることができた。また、各事業への参加を通して、市民に広く青少年の健全育成についての理解を深め、健全育成運動の充実を図ることができた。
(10)-2	・草津市子ども会リーダー養成講座において、仲間との協力や思いやりの心などリーダーとして必要な資質の習得を図るとともに、特にボランティア活動においては、地域の中で活動するための地域福祉に対する心構えなどの習得を図った。また養成講座受講する中で、地域の大人とのつながりも深まり、小学校卒業後も地域の活動に積極的に参加して、ジュニアリーダーとして活躍する青少年もいた。
(10)-3	・少年補導委員とともに、街頭巡回活動(通常、特別、学区地区)を実施した。 ・無職少年対策指導事業、立ち直り支援事業「あすくる草津」の推進などに取り組んだ。 ・関係機関と連携を図り、青少年・立ち直り支援等の相談業務に取り組んだ。

<b>今後の課題</b>	
(10)-1	・青少年健全育成市民運動がますます市民に定着し、理解を深められるよう、各地域ごとの特性を生かしながら事業に取り組むとともに、より一層の効果が得られるように支援していく。また、各学(地)区のそれぞれの取り組みの交流を図り、青少年健全育成の運動をさらに充実させる必要がある。
(10)-2	・6年生リーダー養成講座事業での経験を活かし、次年度にジュニアリーダーとして養成講座に参加してくれる青少年が、長期にわたり活動できる体制づくりが必要である。
(10)-3	・関係機関、団体とともに、青少年の健全育成、非行・被害防止活動につとめる必要がある。 ・保護者、関係機関との連携を深め、互いの情報を共有し、少年の就労、就学、家庭支援などに取り組む必要がある。 ・関係機関の相談窓口の充実により、相談件数が減少してはいるが、潜在的に相談を必要としている人がいる。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(10)-1 青少年育成市民運動推進事業	生涯学習課	青少年育成活動団体・指導者の育成と活動支援を行った。	参加者数	734	756	人	→	b
(10)-2 草津市子ども会6年生リーダー養成講座事業	生涯学習課	草津市子ども会6年生リーダー養成講座事業の活動支援を行った。	参加者数		105	人	↗	a
(10)-3 少年センター(あすくる草津含む)相談事業	少年センター	少年に関わる相談を行った。	相談活動	841	673	件数	↘	b

外部評価委員の意見
○(10)-3少年センター相談活動数について、H21からH23まで減少の幅が大きいので、これの原因が何かを分析する必要がある。減少が悪いことではないが、その背景を知ることは大事である。相談件数が減少している中で、その背景を知り、今後どのように相談活動を実施していくかが次の課題となっていくだろう。

<b>基本方向</b>	1	「子どもの生きる力を育む」	評価
<b>目標</b>	③	確かな学力の育成	A
<b>具体目標</b>	ア	学力の向上	2.6
<b>施策</b>	(11)	学力向上プログラムの実施	/
			/

<b>具体施策</b>		評価
(11)-1	すべての子どもを対象とする漢字検定、計算検定、英語検定の取り組みを進めます。	3.0
(11)-2	朝のモジュール学習を通して、子どもの学びの姿勢を育成します。	2.0
(11)-3	社会で自己実現できる力を育て、生きる力の育成を図ります。	3.0
(11)-4	各種検定やテストにより子どもの学力状況を把握し、学力課題の克服に努めます。	3.0
(11)-5	家庭と協力して振り返り学習が定着するよう努めます。	2.0

<b>主な取り組みの成果</b>	
(11)-1	・すべての小学校で漢字検定、計算検定を、すべての中学校で漢字検定、英語検定に取り組み、一人ひとりが自分の目標を持って学習することができた。その成果としては、児童生徒個々の積極的な取り組み状況の他、漢字検定では1小学校が、英語検定では全中学校が奨励賞などの団体賞を受賞することに表されている。
(11)-2	・朝の学習で読書やドリル学習などに取り組むことを通して、1日の学校生活のスタートを大切にする「学びの姿勢」が確立された。年度を継続して取り組むことで、落ち着いた学びのある学校風土が築かれている。
(11)-3	・全小中学校において、国語力向上事業や理数教育推進事業、読書活動推進事業などの学力向上重点事業に継続して取り組み、これから社会において自己実現していくための基礎となる力が育ちつつある。
(11)-4	・計算検定やプレ漢字検定を、学期ごとに行うことで、教師が子どものつまずきを発見し、年度末の検定に生かすとともに、子どもたちの基礎学力の充実を図ることができた。
(11)-5	・通信や学校説明会を通して、学習習慣の定着を図ることができた。また、中学校区で話し合い「学びの手引き」を発行し、地域と家庭と学校が連携をとりあって、家庭学習の定着に取り組む学校ができてきた。

<b>今後の課題</b>	
(11)-1, 2	・検定に向けた学習意欲が継続できるように、教材の開発や教具・参考図書等の支援体制を、一層強化していく必要がある。
(11)-5	・家庭教育を充実に向けて研修会やリーフレットによる保護者への働きかけや、全中学校区ごとの「学びの手引き」の発行など支援が必要である。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(11)-1 検定事業	学校教育課	漢字・計算・英語検定を推進した。	実施校数	19/19	19/19	校	→	a
(11)-2 モジュール学習	学校教育課	朝の学習で読書やドリル学習等に取り組んだ。	実施校数	19/19	19/19	校	→	b
(11)-3 学力向上重点事業	学校教育課	学力向上事業の取組を通して「自分にはよいところがある」と考えられる児童生徒の育成を図った。(※70%以上)	肯定的回答をした児童生徒の割合		79.3	%	↗	a
(11)-4 ピタゴラス検定等	学校教育課	プレテスト等を行い、小学校の子どもの計算力の習得を図った。	実施校数	13/13	13/13	校	→	a
(11)-5 学校説明会等の実施	学校教育課	学校説明会や学校通信等を通して学習習慣の定着について啓発した。	実施校数	19/19	19/19	校	→	b

上表の※は「草津の教育がめざすもの」に掲げる成果指標値  
「草津の教育がめざすもの」は、平成23年度に編纂し、草津市教育振興基本計画の実現のための平成26年度を到達年度とした学校教育に関する成果指標を設定した。

外部評価委員の意見
○(11)-1検定事業を子どもたちが個々に目標をもって取り組めているというのはすばらしいと思う。個々の子どものやる気に沿ったきめ細やかな指導がされていると思うのでこのまま進めさせていただきたい。
○(11)-4で取り組みの成果に「基礎学力の充実を図ることができた」とあるが、実績が校数で昨年と同値のため、a評価に上ったことの説得力に欠ける。草津市の教育をよりアピールするためにもっと積極性のある表現にした方が良い。

<b>基本方向</b>	1	「子どもの生きる力を育む」	評価
<b>目標</b>	③	確かな学力の育成	A
<b>具体目標</b>	イ	学習意欲の向上	3.0
<b>施 策</b>	(12)	電子黒板を利用した授業の推進	△
	(13)	各界トップによる特別授業の推進	△

<b>具体施策</b>		評価
(12)-1	全教室で電子黒板や関連機器が使えるようにし、ICT授業を推進します。	3.0
(12)-2	全教員が授業改善に取り組み、「よくわかる授業」を進めます。	3.0
(13)-1	文化、芸術、学問、経済等、各界の第一人者を小中学校に招いて、特別授業を行います。	3.0

### 主な取り組みの成果

- (12)-1 ・電子黒板を活用する教員が小学校で95%以上となり、中学校では89%となるなど、電子黒板を使い、わかる授業づくりに取り組むことができた。また、独自のデジタル教材作成に取り組む教員も昨年度と比較して増えてきている。
- (12)-2 ・教育研究所や校内研修会などで電子黒板の活用をテーマに取り上げ、全ての教員がICTを活用した授業に取り組むことができた。また特別支援教育の観点を重視した「すべての子どもにとってわかりやすい学習環境の整備」に取り組む学校が増えた。
- (13)-1 ・各校が「学校教育モデルプラン推進事業」による特色ある教育活動を開催し、そのなかで、各界トップによる特別授業を実施できた。全小中学校で70回[3(教育委員会主催)+67(学校主催)]の授業を行い、子どもたちは将来の夢や希望の実現をめざして自分の生き方を見つめる貴重な機会とすることができた。

### 今後の課題

- (12)-1・全教室に電子黒板とデジタル教科書が導入されたこともあり、校内研究と連動させ、ICTの効果的な活用法やICTを使った授業改善の方法を明らかにする必要がある。
- (13)-1・学校教育モデルプランの中での特別授業の位置づけをより明確にするとともに、各校のプランに最も適した人材を確保していく必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(12)-1 学校ICT化の推進	学校教育課	教員の電子黒板の活用を推進した。(※小学校教員95%以上)	電子黒板を活用する教員の割合	90	95	%	↗	a
(12)-1 学校ICT化の推進	学校教育課	教員の電子黒板の活用を推進した。(※中学校教員80%以上)	電子黒板を活用する教員の割合	80	89	%	↗	a
(12)-2 授業改善	学校教育課	ICTの有効活用により「授業がよくわかる」と考える児童生徒の育成を図った。(※88%)	肯定的回答をした児童生徒の割合	84	86	%	↗	a
(13)-1 各界トップによる特別授業	学校教育課	各界トップによる特別授業を開催した。	開催校数	6	19	校	↗	a

上表の※は「草津の教育がめざすもの」に掲げる成果指標値

「草津の教育がめざすもの」は、平成23年度に編纂し、草津市教育振興基本計画の実現のための平成26年度を到達年度とした学校教育に関する成果指標を設定した。

### 外部評価委員の意見

○電子黒板は経費の問題も大きい中、早く取り組まれたことはすばらしい。電子黒板は、それを用いることで子どもが楽しく学べ、より深く理解できるようにすることが大事である。授業展開を工夫して、「授業がよくわかる生徒」をさらに増やしていくって欲しいと思う。

○電子黒板は、授業参観などの際に使われているのを見るが、動きがあって授業自体はわかりやすくなっている。良いと思う反面、目がちかちかするので視力が心配である。ただ、授業は本当にわかりやすく、ここ1年はどの先生もすごく上手く活用できるようになられたと実感している。

○視覚情報は大量の情報が入ってくる一方で記憶から薄れやすいものである。聴覚情報は限られた情報量だが長く記憶に残る。電子黒板で効果的に子どもに学習させるためにはどうしたら良いのか、見てておもしろいで終わるのでなく、学力を上げるためにどうつなげていったら良いのかが次の課題になる。

<b>基本方向</b>	1	子どもの生きる力を育む	評価
<b>目標</b>	③	確かな学力の育成	A
<b>具体目標</b>	ウ	読書活動の推進	2.9
<b>施 策</b>	(14)	読書活動の推進	

<b>具体施策</b>		評価
(14)-1	本の読み聞かせや学校図書館の業務支援を行うボランティアの育成や交流活動を進めます。	3.0
(14)-2	草津市子ども読書活動推進計画に基づき、本好きな子どもたちの育成に努めます。	2.8

<b>主な取り組みの成果</b>	
(14)-1	・学校図書館運営サポートの一週2日配置によって、学校図書館の環境整備や貸出・返却業務の支援を進め、児童生徒の図書館利用は活発なものになってきている。
(14)-2	・「読書大好き草津の子ども推進事業」のもと、「子どもが輝くブックトークコンサート」を開催したところ、親子連れに多く参加していただき、家庭での読書推進活動につなげることができた。 ・本市における子ども読書活動を総合的に推進するために「草津市子ども読書活動推進協議会」を開催し、関係各課と子どもの読書活動推進についての方策を協議した。 ・子どもの読書量を調査した結果、子どもの1ヶ月の読書量が増加した(小学生:10.5冊→10.7冊 中学生:1.9冊→2.9冊)。特に、中学生については、草津市子ども読書活動推進計画の目標値である2.2冊以上を初めて達成することができた。 ・児童サービスに入れ、「おはなし会」「おはなしのじかん」「読書講演会」「こどものつどい」「子どもの本の教室」などの事業を開催した。また、「図書館見学」や「団体一括貸し出し」等を通して園・学校における読書活動を支援してきた。

<b>今後の課題</b>	
(14)-2	・平成20年度に策定した「草津市子ども読書活動推進計画」について、現状を踏まえたうえでの改訂について検討していく必要がある。 ・子どもたちが本に親しみ、気軽に来館できるようなイベント事業などを開催する必要がある。

取り組みの状況		活動の概要	実績					
事業名	担当課		項目	H22	H23	単位	推移	評価
(14)-1 学校図書館運営センター配置	学校教育課	学校図書館の環境充実のため、学校図書館運営センターを配置した。	配置校数	19/19	19/19	校	→	a
(14)-1 学校図書館整備事業	学校教育課	学校図書館の整備を進め、図書館を利用する児童生徒の育成を図った。(※300人/月・校以上)	1月・1校あたりの利用児童生徒数		559	人	↗	a
(14)-2 子どもの読書活動に関する調査	生涯学習課	小学生が1か月に読んだ書籍の平均冊数を調査した。	冊数	10.5	10.7	冊	→	b
(14)-2 子どもの読書活動に関する調査	生涯学習課	中学生が1か月に読んだ書籍の平均冊数を調査した。	冊数	1.9	2.9	冊	↗	a
(14)-2 子どもの読書活動に関する調査	生涯学習課	小学生が1か月に書籍を読まなかつた児童の割合を調査した。	割合	2.2	1.5	%	↖	a
(14)-2 子どもの読書活動に関する調査	生涯学習課	中学生が1か月に書籍を読まなかつた生徒の割合を調査した。	割合	38.1	18.0	%	↖	a
(14)-2 子どもが輝くブックトークコンサートの開催	生涯学習課	家庭での読書活動推進のため開催した。	人数		281	人	↗	a
(14)-2 図書館運営事業	図書館	児童図書の収集と貸し出し、各事業を通じ、子どもの読書活動と啓発を行った。	児童図書貸出冊数	361,041	370,773	冊	↗	a

上表の※は「草津の教育がめざすもの」に掲げる成果指標値  
「草津の教育がめざすもの」は、平成23年度に編纂し、草津市教育振興基本計画の実現のための平成26年度を到達年度とした学校教育に関する成果指標を設定した。

外部評価委員の意見
○図書室の整備を学校として心がけており、子どもが図書館に来やすいように積極的に工夫し、取り組まれている。中学生の本を読まなかつた生徒の割合が大きく下がっているのも、こういった取組の成果だと思うので、今後さらに肉付けしていくいただきたい。
○ブックトークコンサートのような催しにはもともと本を読むことに興味のある子が集まりやすいが、このような事業を推進する際はもともと本には興味のない子を惹きつけるような展開をしなくてはいけない。